

## はしがき

これまで社会福祉をめぐる課題では、グローバル化、少子化・高齢化などの問題が主であった。だが、ここ数年の間に大規模な自然災害に襲われ、加えてコロナ禍による世界規模の感染拡大による生活困窮者の増大など、全世界的な規模で人々の生活様式に変化が強いられた。

とりわけ、新型コロナウイルスの感染拡大の影響は、飲食業や観光業などのサービス産業で働く人々の生活を直撃すると同時に、医療や介護・保育分野で働く「生活に不可欠な人材の重要性・必要性」を再確認させるものとなった。同時に、この数年間のコロナ禍では、生活困窮者の増加によって人々の格差がより顕在化している。

こうした中で、福祉の支援を必要とする生活困窮者に向けて、多くの経済対策が打ち出されたが、「誰が得をし、誰が損をするのか」といった損得勘定で福祉的給付がとらえられている。福祉対象者のすそ野が拡大することと同時に、福祉のあり方や考え方そのものの再構築が求められているといえよう。

各章の担当者は、上記のような問題認識を持ち、これからの社会福祉を展望しながら以下の点に留意した。第1に社会福祉関連の定義および理念、歴史的な背景や経緯について、第2に社会福祉制度の仕組みや現状について、第3に今後の課題について、第4に諸外国の社会福祉政策との比較についても論じている。

加えて、読みやすく、理解しやすく書くことに留意している。例えば、法律や国家試験など、また社会福祉士や精神保健福祉士の国家試験・専門用語についても、ゴシック体で表記している。さらに、法制度上の名称としては、老人・高齢者、障害者、児童・子どもと表記している。それ以外の場合は、高齢者、子どもを使用している。ただし、障害者の表記については、執筆者間での議論も重ねたが、障害者のままで使用している。

このような問題意識の下で、新たな社会福祉の構築に向けた取り組みの必要性を起点に、本著は誕生した。その意味で本書は、保育・介護などの社会福祉を学び、福祉の専門職者として必要な基礎的知識、問題となっている社会福祉政策についても諸外国と比較検討し、議論できるよう工夫している。

そして、社会福祉がなぜ必要なのかを考える契機となり、福祉現場で実践・活躍するために本書がお役に立てば、编者として幸いである。

本著の刊行に際しては、法律文化社・編集部の舟木和久氏および徳田真紀氏に大変お世話になった。心より、お礼申し上げる。

2022年2月

烏野 猛